

2. スポーツと新しい社会運動の可能性 - 新潟 Alliance2002 を例に -

坂 なつこ

はじめに

昨年、韓国・日本で行われた 2002FIFAW 杯では、開催各都市での市民やサポーター・ボランティアグループによる大小様々な活動がみられた。パブリックビューイングや街頭応援など「ワールドカップ・フィーバー」は「にわかファン」という言葉とともに、社会現象とまでなった。しかし、他方で、サッカーにおけるサポーターやボランティアの存在は 1998 年フランス大会以降注目されるどころであり、日本の各開催都市においても、2002 年を目指したサポーター・ボランティアグループが、まさに「ボランティアな」活動によってさまざまに大会を盛り上げる姿がみられた。そこで活動したグループのいくつかは、韓日大会の以前から様々な活動を行い、単に 2002 年のみのイベントのためだけでなく、「地域」や「スポーツ文化」をキーワードに現在でも活動を続けている。サッカーを通して地域に、あるいは日本にスポーツ文化を根づかせたいという彼らの活動は、様々な広がりを持ち、「観客」に限定されないネットワークを広げつつある。

このような活動は従来の「スポーツファン」の枠組みをはみ出し、A. メルッチが「新しい社会運動」と呼ぶところの特徴のいくつかを示している¹⁾。これらは、現代のグローバリゼーションにおける社会の変容のもとでみられる多様な市民運動のかたちと重なり合う²⁾。現代の社会運動とは、メルッチによれば「過去における運動以上に、日常生活における自己実現の必要などの非政治的分野に向けてシフトしてる。この点において社会運動は、紛争的かつ敵対的であるが、政治的志向を持ってはいない。それらの運動は、文化的理由に基づいて複合システムの論理に挑戦しているからである」³⁾。

ここでは、それらの活動のひとつとして、新潟

を拠点に活動をする NPO 法人「Alliance2002」について取り上げる。Alliance2002 では、サッカーという軸を共有しながら、サッカーには「する」、「みる」、「支える」、あるいは「語る」といった多様な楽しみ方がある、という考えを持ち、様々な指向のグループが緩やかに連帯するという形態をとる⁴⁾。スポーツに対するそのような考え方や、水平的で多様な組織のあり方は、日本の伝統的スポーツシステムにはみられなかった形態であり、従来の企業や学校を中心としたスポーツの場を、新しいスポーツのあり方へと転換させるものといえる⁵⁾。そして現在のグローバリゼーションという状況のもとでとらえるとき、サッカーサポーターのそのような活動は、「まさしくグローバリゼーションという時代の局面の中で現れている『多様な渴望の噴出』と多様化する『自律的意志決定』の様態の一つ」とみることができるのである⁶⁾。

1. Alliance2002 (新潟)

Alliance2002 は、1998 年に JFL アルビレックス新潟のサポーターグループとして立ち上げられた。当初はグラウンドでのゲーム観戦や応援をする、いわゆる「ゴール裏」として出発した。だが、1999 年にアルビレックスが J2 に昇格した際に、特定チームの応援をするという色合いを薄め、J2、アルビレックスのホームゲームの運営サポート、各種イベント運営などを手がけるボランティアグループ「スピリット・オブ・にいがた（以下、SON）」を発足させることになる。その際、「ゴール裏」サポーターは「ウルトラにいがた（UNI）」と名前を変え、その連合として Alliance2002 が立ち上がる。発起人である HQ の一人は、その発足について、「サッカーって応援するばかりが楽しみ方じゃないという考えを具現

化する」かたちでボランティアのグループを立ち上げたと述べている⁷⁾。

Alliance2002 は、次の図をホームページに掲載し、「Alliance2002 は、草の根の活動を通して 2002 年のワールドカップ新潟開催を盛り上げよう、そんな目的から生まれたムーブメントです」と述べ、五つの柱とヘッドクォーターにより活動の形態を表現している⁸⁾。



) 「ウルトラにいがた」(以下 UNI) : 「ゴール裏」で日本代表や新潟におけるチームを応援するサポーターグループ。

) 「スピリットオブにいがた」(以下 SON) : 新潟で行われる J リーグチームの試合会場での運営等ボランティアグループ。

) 「もくはち CLUB」 : アルビレックス新潟が所有する芝のフットサル場を借りて行われているフットサルクラブ。参加者は当日参加料(500円)を払い、その場でメンバーを組む。木曜日、夜八時開催の意味。現在参加者が増えたため初心者を対象とする「もくはちマンデー」(月曜日開催)も開催。

) 「サロン 2002 in にいがた」(以下「サロン」) : 月一回程度(現在は不定期)ゲスト等を招いて様々な観点から「文化としてのサッカー」について意見を交換する場。

) 「広報」 : 彼らの活動を対外的に示すだけでなく、ワールドカップに関するものからアルビレックスや北信越リーグに所属するチームである新潟蹴友会、学生リーグに至る新潟サッカー界の情報を、インターネットのホームページや

スタジアムでのフリーペーパー配布などにより発信している。

) ヘッドクォーター(HQ) : 各活動を支援し、Alliance2002 としてまとめる役割を持つ。

2. 参加の実態

次に、「スポーツボランティア」という比較的新しい領域で活動するSONと、Alliance2002 という組織を特徴づけるHQに対して行ったインタビューおよびアンケートをもとに、Alliance2002 という組織の概観を報告する。回答人数はそれぞれ、HQ 7人、SON13人(2001年11月実施)となっている。主たるHQには対面でインタビューも行っている⁹⁾。

「ゆるやかな連帯」がコンセプトであるAlliance2002 において、それぞれの活動への参加の様子は、どのようなものであろうか。

Alliance2002 の複数の活動に対しては、全てのHQが複数の活動に参加している(参加したことがある)と答えている。それに対してSON会員については複数の活動に参加しているのは3分の1である。さらに、この複数の活動のなかには、サポーター組織に参加しているとの回答はゼロであった。つまりAlliance2002 という組織の中で活動の中心となっているサポーター組織と、ボランティア組織のメンバーは完全に住み分けがされているということがわかる。

これは、当然ながら第一にそれぞれの活動形態により制限されている。例えば、アルビレックスの試合時、UNIメンバーは観客席(ホーム側ゴール裏)で応援する。同時にSONメンバーは、スタジアムの設置、観客誘導、電光掲示板操作、清掃などゲーム周縁で支援をしているということがある。しかし、それだけではなく、「サッカーを見ること」あるいは「(自分の好きな)チーム・選手の応援」が直接的な目的でグラウンドでの声援によって文字通りゲームを盛り上げようとするゴール裏サポーターと、ホームゲームでも中立的で秩序だった態度を求められるボランティアと

は、軋轢が生じやすいと考えられる¹⁰⁾。

だが新潟においては現在Alliance2002 内部だけに限らず、両者の関係は良好であるとHQの一人は述べている。この一見相容れることのないサポーターグループとボランティアグループが同組織に所属しているということがAlliance2002 の特徴でもある。他方で、「ゴール裏」内部でも「サッカーをしないで語るだけ」のサポーターとプレイをしたことのある（「サッカーを知っている」）サポーターのあいだでも軋轢が生じることがインタビューでは述べられているが、現在この部分をつないでいるのが「もくはち」であるとされる¹¹⁾。このような各活動のバランスが、Alliance2002 の掲げる「観る（応援する）」「蹴る」「語る」そして当事者として「参加する」というコンセプトを可能にしていると考えられる。

では、個々のメンバーはどのようにしてAlliance2002 にコミットするようになるのだろうか。

活動への参加理由（複数回答）として挙げられるものは、「サッカーが好きだから」がもっとも多く、次いで「ボランティアに興味があった」「全く知らなかった人と仲間になれるから」「新潟に何か貢献していると思えることをしたかった」となっている。また、「2002 年に向けて何らかの活動をしたかったから」とある。それに対して、HQ はほぼ同じ傾向を示すが、「仕事や家庭以外で、自分が必要な場所を求めていた」という項目に 3 分の 1 が回答をしており、より「自己実現」的な指向が強いといえる。

ここでは、サッカーをキーワードとしながら、地域、精神的な充実、コミュニケーションなどの多様な動機がみられる。このような多様な参加動機を、Alliance2002 では組織としての整合性へと統合していくのだろうか。

メルッチは、しかし、集合行為とは、ある整合性を持った経験的現象ではないとする。集合行為とは、可能性と抑制が交錯する場で展開される目的探求的な方向性の産物であり、行為者が集合行

為を生み出すときには、自己と環境（他の行為者、入手可能な資源、機会、障害）とを定義するとする。このような諸定義は単純なものではなく、相互作用・交渉・紛争によって生み出される」とされ、整合性を前提とすることはできない。そのような多極的な行為システムにおいて諸個人は、揺らぐことのない「われわれ意識」を形成するために、少なくとも三つの方向に向かって - 1) その行為の目標、2) 利用しうる手段、3) 行動が起こる環境 -、お互いに骨を折りながら交渉し、それに適合するように努めているのである¹²⁾。また、個々の機軸においても、短期的目標と長期的目標、資源の活用などにおいて軋轢や緊張が生じる。先に述べたボランティアとサポーターの軋轢、「もくはち」による資金の配分、また個々のメンバーにおいてもそれぞれの活動動機や目標との矛盾、あるいは仕事・家族と活動の葛藤・妥協など、様々な緊張関係を含みもつなかで、自己の活動を構成していくといえる。個人のアプローチは多様であり、それも活動に参加する過程で変化するものである。集合行為とは、対照的で多様な要求を満たさなければならないものであって、決して単純な行為者の意志表現ではないといえる。

3. HQ

メルッチは、「この交渉に対して、より持続性があり予測可能な秩序を与えようとするのが、リーダーシップの形態であり組織形態である」とする¹³⁾。そこでは、行為者がその行為の「目標、手段、環境について交渉する能力」に依存しているのである。Alliance2002 においてはHQがどのような「能力」をもっているかが組織の持続性に関係してくると考えられる。

新しい社会運動に関与する行為者は極めて多様であるが、諸個人が集合的アイデンティティを構築する能力は、彼らが利用可能な（学歴/専門的技術/社会的技量等）資源群に根ざしている。その上で、運動の社会的構成要素は、a) 「新中間階級」あるいは「人的資本階級」、b) 労働市場

においてマージナルな地位にある「豊かな周縁」、c) 独立的な「旧中間階級」(農民、職人)である。第一グループの「新中間階級」は二つのグループから構成されており、一つは「既存のエリートに挑戦する新エリート層」、一方は「機会の余剰とシステムの抑止の両方を経験した『人的資本』専門職」である。その特徴としては、「より伝統的な政治的・社会的ネットワークに深く参与」し、「学歴が高く比較的若い」ことを挙げている¹⁴⁾。このような指摘は、とりわけHQと重なる。大半が大卒者であり、20代後半～40歳以下で構成されている¹⁵⁾。

しかし、個々の活動を支援する繋ぎ役としてのHQが、単なるまとめ役なのか、それとも向上心をもって活動に積極的に関わられるHQになるのかという課題が生じる。「HQ会議での意見交換によって、そこで勉強して育成されるのではないか」という意見がみられる一方で、「そこで意見は言えても、それを実行に移していくことができるのかという、実行力」が問題であり、それを発揮できることが「代わりにいない」HQの特徴でもあるという。「実行力」とは潜在的な資源と関係すると思われる。彼らは、自分たちが利用可能な資源を効果的に用いることができる。情報・資源へのアクセス、利用に関して高位にあるものが、組織の主導権を握ることになり、それが活動への参加率や、役割分担、権力委譲などに影響を与えている。それが可能なのは「新中間階級」「人的資本階級」であり、彼らは自らの教育上・職業上・社会上のステータスにより提供されるアイデンティティ資源を、初期の段階で利用することができるからである¹⁶⁾。人選だけではなく、職業上のスキル、経験等が有効に発揮される場がAlliance2002となっているといえる¹⁷⁾。

HQの中心は県外出身者であり、転職の可能性をもつ。実際にW杯を前に発足時からの中心的HQたちが転職で県外へ転出している。そのためHQの引継や育成が重要な課題となっている。ここには、既存の社会システムにより深く関与している県内出身者を増やしていきたいという意見も

述べられるが、企画力や運営能力を備えた人間は「既に新潟の既存の組織に何らかの形で取り込まれている可能性が高い」という。これは、HQの多くが新潟という地域において「豊かな周縁」であるということと、「新中間階級」に既存の社会システムへアクセスするというような流動性が与えられている場合、それらは紛争当事者から対抗エリートへと、その役割をシフトすることができるという点と関わっている。紛争当事者が活動の中で交渉し淘汰され、新たな権力として発動できる可能性を示唆している一方で、すでに対抗エリートに組み込まれている資源をどのようにして調達するかという問題を残しているといえる。

4. 集合的アイデンティティの多元性

しかし、Alliance2002は「緩やかな連帯」をその形態として掲げており、個々のメンバーがどのようにして集合行為に関与することになるのか、すなわち多様なアプローチや動機から加わっている行為者が、「共通の方向性を形成し、それに基づいて一致団結して行動することを決意する過程」とはどのようなものなのかをみる必要がある。メルッチは、「いかなる動員の過程も真空状態で始まることはない」とし、「すでに存在している社会的関係のネットワークが触媒」となり、個人の集合行為における投資を軽減するとする¹⁸⁾。既存のネットワークが、地縁、血縁、学縁といった社会的関係を基盤とし拡充していく一方で、Alliance2002やその他のサッカーサポーターグループでは、インターネット等の情報メディアを媒体に活動を広げていくという特徴がみられる。

Alliance2002へのアクセスでは、参加を促した媒体(活動に関する情報源)は、SONメンバーでは「友人から」が4人、独自に「ホームページから」アクセスしたのが4人、そして最も多かったのが、「アルビレックスの公式ボランティアに参加している中で、一緒に活動するSONから誘われた、魅力を感じた」というものである。HQでは、実際に活動を見て参加したのは2

人であるが、その他は「友人から」が最も多く、それ以外では仕事や個人的な関わりから知らず知らず参加しているようになったという回答であった。インターネットも利用されているが、顔と顔を合わせてのコミュニケーションによって参加が促されたというのが、どちらも最も多い。

他方、実際の活動での彼らの連絡手段は、ホームページへの書き込み、メーリングリストが主であり、ここではインターネットが中心となる。例えば、SON の試合会場でのボランティア活動で、活動後反省会を行うが、その詳細については後日ホームページに掲載される。また、試合によってはその場での反省会を行わず、随時、気づいた点をホームページ内の掲示板に書き込み、ネット上で意見調整をするという手段をとっている。これらは、制限されたものではなくメンバー以外でもネットにアクセスできれば自由にみることができるオープンなものである。

メンバーの調達ネットワークが、対面的なコミュニケーションではありながらも、支配的なシステムにあるような、地縁、血縁、そしてとりわけスポーツの場合に重要な学縁というネットワークを基盤としていないことによって、その後の関係形成も限定的ではなく、より開放的で水平的なネットワークが可能になると考えられる。他方、インターネットへのアクセスができることが、このネットワークの参加への前提ともなるといえる。ここでは、HQ と同様に、情報へアクセスできる資源が問われるといえる。

活動を行っていく中での意識については、「(Alliance2002 の)活動以外で交流をもっているか?」という質問に対しては、SON のメンバーは半数が「ある」と答えた。対して HQ においては、ほぼ全員が「交流の場をもっている」と答えており、開きがある。だが、SON メンバーにおいても今後 Alliance2002 以外での交流の場を持ちたいという意識は高く、13 人中 11 人が何らかの形で行いたいと考えていた。

人的交流に関しては、「Alliance の活動に参加して良かったと思う事」という質問で、SON メ

ンバー、HQ とともに「新たな友人や仲間ができた」という回答が最も多く、「活動自体が楽しい」「自分自身の啓発につながった」という回答が続くように、肯定的であることがわかる。

「(Alliance2002 の活動で)これから参加しようと思っているもの、または興味があるものは?」では、SON の 3 分の 2 の人が複数グループへの参加意志を示した。

だが、SON メンバーの中ではアライアンス (Alliance) という形態や、組織自体を意識せずに活動している場合もある。例えば「『グループ』という言葉を使うほど、連帯感はあまり…。ボランティア活動をしている仲間という思いはありますが」という意見や、「他の Alliance2002 の活動のことはよくわかりません。これからも他の活動には関心がありません」など各メンバーには意識格差があると考えられる。

これは Alliance2002 という組織への帰属意識の薄さともいえるが、他方で多様なアプローチが可能であること、Alliance2002 のような団体が「組織維持先行」でないことを表している。

HQ の一人は、「はたから見れば Alliance という言葉はなくなってもいいですよ、別に。それぞれの活動が個々として、活動が進んでいけば Alliance という名前だったり、形式は別に(中略)表に出なくてもいいと思っています」と述べる。

従来型の地縁、学縁などがベースの場合、人的ネットワークはほとんど「地元」を基盤に形成されており、物理的・情緒的に持続しやすい。他方で、Alliance2002 のような場合、その集合的アイデンティティは、人的ネットワークが柔軟であり、常にプロセスとして構築されるため、その方向性は流動的ともいえる。これらのネットワークのなかで、「個人は相互に影響し合い、交渉し合い、そうすることで行為のための概念的・動機的フレームワークを構築する」のであり、参加の動機付けもまた、相互作用を通じて構成・発展されるものであるととらえられる¹⁹⁾。ここでは、集合的アイデンティティがどのように生み出されて

いるかをみる必要がある。

メルッチは、「集合的アイデンティティとは、相互の交流している諸個人によって生み出される、相互作用的でありなおかつ共有された定義である。そのような人々は、自らの行為の方向性に関心を持ち、それと同時に、その行為が起こる機会やその拘束の現場に関心を持っている」とする²⁰⁾。そのような、集合的アイデンティティは、1) 行為の目標・手段・環境に関する認知フレームワークを形成する、2) 伝達・交渉・意志決定をする行為者間の関係を活性化する、3) 諸個人がお互いを認識し合えるように、感情的な交流を行う、という三局面を含むとする²¹⁾。

W杯というイベント（短期的課題）がなくなった今後、長期的課題（百年構想、草の根からのサッカー振興、スポーツ文化、地域など）を、どのようにそれぞれが認識しえるかが重要になってくる。また、メンバーの関係の活性化をどのように促すか、新しい人材をどのように呼び込むか、またインターネット上の意見交換だけではなく、Face-to-Faceのコミュニケーションの場として、サロンやもくはち、ボランティアの場でのやりとりも重要であるといえる。

他方でAlliance2002という組織については、ホームページ上では目標を掲げているが2002年以降の形は流動的である。その特徴について、発起人であるHQの一人は「常に具体的に、目先の何かとのやりとりの中で、結果として方向性が決まっていく」と述べている。

この言葉に表されているように、活動の中で変容していくその動きについて、HQにおいても「こうならなければならない」という義務感や、組織における拘束力というのは、強固なものではない。それは、彼ら自身が現在進行中である活動を認知し、自己再帰的な能力によって、進むべき方向性を修正しながら活動しているからと考えられる。

これについて、メルッチは「複合システムでは、合意形成のために利用可能な空間は、限定され一時的である。差異は変化し、紛争はシフト

し、合意は満足をもたらさなくなり、新しい支配形式が絶えず出現するために、これらの空間は、継続的に、しかも迅速に再定義されねばならない」とする²²⁾。Alliance2002のようなネットワーク型の組織においては、この再定義が迅速に行われなければならない。短期的な戦略や目標を具体的に掲げることによって求心力とし、常に長期的な目標に照らして活動の中で目的と戦略とを修正し続けなければならないのである。

5. 再帰的過程としての「サロン」

ここで、再定義の場として重要になるのが「サロン」であろう。これは、従来のスポーツファンと異なる活動としてもあげられる。サッカーを軸に様々な分野からゲストを呼ぶなどして、シンポジウム等を行うのだが、このような定例会が、「学習過程」として働くのである。

以下に「サロン」の開催テーマを示す。

（ホームページより作成。ここではパネラー/ゲストは所属のみ）

《サロン 2002 in にいがた》

プレイベント 99.4.23（金）「メディアと共に語る新潟サッカーの今と未来」新潟日報、FMしばた、FM新潟、テレビ新潟

第1回 99.5.21（金）「サッカーくじをホンキで考える」文部省スポーツ振興投票準備室

第2回 99.6.25（金）「新潟におけるスポーツビジネス」株式会社テレビ新潟放送網（TeNY）事業部長

第3回 99.7.17（金）「サッカー振興を市民の手で」筑波大学付属高校・サロン2002、シド・ファイナル・アーツ、日揮、写真家、文部省

第4回 99.8.20（金）「スポーツボランティアの理想と現実」長野県サッカー協会

第5回 99.9.19（金）「W杯、準備のあんばいはどうですか？」2002年W杯新潟県開催準備委員会事務局

第6回 99.10.22（金）「写真展・サポーター新世紀レビュー／欧州最深部に行く」写真家

第7回 99.11.19（金）「十日町市における公認キャンプ招致活動について」W杯公認キャンプ十日町誘致実行委員会

- 第 8 回 99.12.10 (金) 「新潟のサッカーシーンを語る」新潟県サッカー協会
- 第 9 回 00.1.28 (金) 「サッカー界ブッタギリ」プロコ
ーチ / 解説者
- 第 10 回 00.2.18 (金) 「スタジアムではピラを撒け！
& 草サッカーはサッカー界のフロンティア - 」草サッ
カーなんでもコーディネーター
- 第 11 回 00.4.14 (金) 「サッカーにおけるメディカル
サポート」アルビレックス新潟チームドクター
- 第 12 回 00.4.17 (月) 「日本代表を語る」日本代表コ
ーチ
- 第 13 回 00.5.26 (金) 「日本代表今昔物語」元日本代
表 GK
- 第 14 回 00.6.23 (金) 「Alliance2002 の現状と今後」
HQ
- 第 15 回 00.7.10 (月) 「W 杯新潟開催を当事者として
考える」電通、名古屋大助手、野村総研、県サッカー
協会理事長、早稲田大教授、新潟市青年ネットワーク
- 第 16 回 00.8.26 (土) 「岐路に立つ草の根運動」サロ
ン 2002 とのフットサル交流 HQ、名古屋大助手
- 第 17 回 00.9.29 (金) 「PALRABOX (パラボック
ス) の挑戦」障害者サッカーチーム PALRABOX メン
バー
- 第 18 回 00.10.27 (金) 「東欧ディープな旅～ディナ
モを追って～」写真家
- 第 19 回 00.11.17 (金) 「朝鮮サッカーを語る」在日
朝鮮蹴球団元北朝鮮代表
- 第 20 回 00.12.8 (金) 「何をやる？ どう仕掛ける？ 開
催地の市民として」新潟市ワールドカップ総合対策室
室長、「ウエルカムにいがた！ 2002」事務局長
- 第 21 回 01.1.26 (金) 「笑顔で帰国してもらうために
～2002 年へ向けた JSA のアプローチ」NPO 法人日本
サポーター協会
- 第 22 回 02.1.26 (土) 「W 杯記念 新春サッカーサロ
ン」エジンバラ大教授、ウイーン大講師、韓国中央大
講師、立命館大教授
- 第 23 回 02.12.6 (金) 「年末サロン～2002 年新潟を振
り返る」アルビレックス新潟業務部長、ゴール裏サポ
ーター、毎日新聞記者、Alliance2002・SON 代表

内容やゲストは、サッカーのゲームやプレイに
関するだけではなく、多岐にわたっていることが
分かる。また、県のサッカー協会、W 杯推進室
(県職員)、文部省など、従来市民団体、ボラン
ティア団体と対置されるセクションである公的機
関からもゲストを招聘しているのも特徴的であ
る。これらの学習会は、ホームページやピラ配り
などを通じて一般にも案内されており、
Alliance2002 のメンバーやサッカー関係者に限
らず、その都度、参加費を払い参加できる。

月例会やシンポジウムなどの開催が重要である
のは、これが Alliance2002 参加への「入り口」
になるだけでなく、「学習過程」としての機能を
果たしている点である。グループ自体が多様な主
体から構成されるネットワークであり、学習会に
よるやりとりやその結果をとおして、新しい文化
モデルや新しい関係諸形式の実験と実践が行われ
る。このようなモデル化は、柔軟性を持ち、運動
自体の自己再帰性が確保される場となる。運動が
情報の交換・循環システムとなり、情報の読みか
えや創造が生まれ、運動自体が「文化の実験室」
としての場となるのである。

メルッチは、現代社会においては「物質の生産
に代わって、記号や社会的関係の生産がその中
心」となり、それゆえ社会が「意味の生産」に介
入する能力を飛躍的に高めるとする。それによっ
てそれまで規制を逃れてきた諸領域 - 自己定義、
感情的関係、セクシャリティなど - にまで拡張さ
れ個人はこの中でコントロールされていっている
のである。そのため、メルッチは「新しい文化モ
デルや新しい関係諸形態に向けての、さらに代替
的な感覚や世界の意味づけに向けての実験」を行
う運動の、新しいスタイル、コミュニケーション
様式などがオールタナティブな文化コードの生産
を行う可能性を持つとし、そこに新しい運動の意
味を見いだすのである²³⁾。

おわりに - ポスト 2002

HQ の一人は、Alliance2002 のスタンスを「地
方から」と「草の根から」の二つである述べてい

る。「百年構想」に共感しつつも、それを「中央主導の運営になりがち」ととらえ、「地方から」の発信を目指すのである。さらに、「草の根から」とは、「プレイヤーだったが、今は引退した。サッカーは好きだけどプレイの経験がない。転勤の為、仲間がいず、プレイや活動ができない。中学まではサッカー部だったけれど、高校のサッカー部にはは入りそびれた」という「日本サッカー協会の目の届かないサッカーファンが、自己実現をできる集まりであると考えています」と述べるのである²⁴⁾。

そのような理念と活動は、意図するとしないに関わらず、既存システムの不備や対抗的価値、あるいは自己の位置する環境を浮き彫りにしてしまう。例えば、Alliance2002 が現在進めている地元 CP サッカーチームとの連携は、福祉制度や環境の整備を認識させもする。また、SON へのアンケートでは、「Alliance2002 の活動に参加してから新潟への見方が変わりましたか」という質問では「変わった」と答えた 9 人のうち「今までより愛着を感じる」が大半であり、その他「新潟県民であることを意識するようになった」「市政や県政に対して敏感になった」とある。また、自由記述欄でも、「市民起点による街の活性化を行っていくべきである」と考える。つまり、各種スポーツ愛好家の欲求を市民レベルで整理して、市民が欲求を解消させる場を提供していく、「サッカーを通じて地域社会に奉仕（貢献）したい」とある。

行政や協会などとの既存システムとの関係について、活動が認知されつつある一方で、「ニュートラルに決裂している」との認識はHQに共通している。だが、今後については意見はさまざまであり、「一定の緊張関係は保ちながらも、協調できる部分がほしい。そういう関係であればいい。今の、それこそ情報も行き来しないような関係であるよりは、そちらの方が健全だと思う」。または「（行政や協会などの）団体との関係は、おそらく変わらないと思います。（中略）変わった時はSON（Alliance2002 も含めて）が無くなると

いうか、いらなくなる」という意見もある²⁵⁾。

では、2002 年を終了した今、Alliance2002 はどのようになっていくのだろうか。

HQ ではほぼ全員がアライアンス（Alliance）という形態を意識して活動をしており、その連携が他のメンバーにも認識されることを望んでいるが、それが Alliance2002 という組織の維持や固定に結びつけている意見はみられない。例えば「スポーツボランティアのニーズというのは、アルビレックスがあり続ける限り、少なくとも新潟では残り続けるわけですよ。（中略）それが SON という組織で残るかっていうのはわかりませんが、少なくともニーズがある以上は、われわれのなかできあがってきたボランティアの人たちは、何らかのかたちでいつづけますよね。パタンと 2002 年が終わったからといって雲散霧消することはないですね。形は変えても、残り続けますよね。それでいいと思っています。」。また、「組織のために何かをやるという考えではなくて、自分が何かやるための組織じゃなかったら、枠組みの中から外に出られないと思うんですよ。（中略）Alliance の機動力とか、名前とか、資金力とか、いろいろな部分をとにかく有効に使っていくことで、自分のサッカーに対する幅を広げていくと同時に、それが結果的に、また Alliance を一つのステージに引き上げられることになると思ってやっている」。

しかし、主要な HQ が転出後のインタビューでは、方向性は変わらないとしつつ、「ただ、それぞれの構成員がそれぞれのことをしているけど Alliance2002 に属してるんだよっていう、ある種一つの、共通のロイヤリティーはほしいなっていうのは前からあるんですよ」という意見も述べられている。「サポーターだけじゃなくて、ボランティアというのもサッカーを構成している要素、仲間だよっていう。いつもは、やってなくても支えている柱はあって、その柱は何を支えているかっていうと Alliance2002 を支えているんだよっていう、そういう帰属意識を持たせたい」と述べている。

Alliance2002 は、一つのあり方として 2002 年 NPO 法人資格取得という選択をした。HQ の一人は「実質的な部分で、NPO 法人化という形をとることによって、逆に次の世代の人を縛ることができるということ」だと表現している。義務と責任という「縛り」が生じるなかで、今後どのように多様な諸個人、諸グループと切り結ぶことができるかが、期待される。

メルッチは現代的な運動組織について、「もはや単に目標達成のための『道具的』存在ではなく、そこではその運動自体が目標となっている。集合行為は文化的コードに焦点を当てるため、運動の形式そのものがメッセージとなり、支配的コードへの象徴的挑戦となる」と同時に、「日常生活の経験に根ざしているがゆえに、前政治的であり、政治勢力が完全にはその行為形態を代表できないがゆえに、超政治的である」という²⁶⁾。しかし、Alliance2002 自身が政治的勢力と結びつくことはあり得ることであり、そこでどのような軋轢が内外で生じるのか、いかにして集合体としての意見を調節する機能をもちうるかが鍵となるであろう。

そこでは、常に、外部に対してはもちろん、内部に対しても開かれ、参加者諸個人が対等な立場にあることから、「個人的な変化と外的行為が結びつくことにより、集合行為は新しいメディアとして機能する。このメディアは、支配的なコードの側の沈黙した要素や恣意的要素を顕在化すると同時に、新しいオルタナティブを公表する」可能性が見えてくるのである²⁷⁾。

そしてその際に重要になるのは、「どのようにしたら集合行為を代表し、その特徴や自律性を失することなくその声が聞こえるような、表現のための民主的公共空間をつくることができるのか」ということであろう²⁸⁾。Alliance2002 自体が、多様な意見や価値の交換がなされる意味交渉の過程となる。それは、サッカーという「趣味の領域」を介することで、「従来のスタイルとは対置されたものとして現れ、組織の自己再帰的性格をつくり出し、自己と他者、環境の解釈と意味づ

け、共通課題とを絶えず認識し再構成することを可能とする」²⁹⁾。そしてそのことが、すでに見られるようにサッカーと多くの地域的課題や他の領域との結びつきを自覚化させる契機ともなり、多様な活動と連帯を生み出す可能性を持つといえるだろう³⁰⁾。

* なお本研究は立命館大学ワールドカップ調査の一部であり、本稿で使用している資料等は、1999 年から行っているアンケート、インタビューをもとにしており、Alliance2002 に関して WEB 上で公開しているものは許可をいただいで使用している（不許可転載）。

[注]

- 1) A. メルッチ『現在に生きる遊牧民 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、1997 年
- 2) 齊藤日出治『国家を越える市民社会 - 動員の世紀からノマドの世紀へ』現代企画社、1998 年。
- 3) メルッチ、12-13 頁。
- 4) このようなスポーツのとらえ方は、現在では東京都の「東京スポーツビジョン」（2002 年、教育庁生涯学習スポーツ部スポーツ振興課）などにも見られ、総合型地域スポーツクラブ政策の「柱」とされている。ただし、ここでの「支える」とは施設整備のことである。
- 5) そのような理念を最もよくあらわしているのが J リーグ百年構想であり、多くのサッカーサポーターが支持するものでもある。『J リーグ百年構想 スポーツで、もっと、幸せな国へ。』下記、ホームページ参照。
- 6) 山下高行「2002FIFA ワールドカップとサッカーサポーター活動」『日本の科学者』Vol. 37、No. 7、2002 年。また、T. Yamashita/N. Saka, 'Another Kick Off: World Cup 2002 and Soccer Voluntary Groups as a New Social Movement', Japan, Korea and the 2002 World Cup, J. Horne/ W. Manzenreiter[eds.], Routledge, 2002. 拙稿「サッカーファンは社会を変えるか - 調査中間報告：視点と仮説」『立命館大学人文科学研究紀要』No. 79、2002 年。北口節子「スポーツへの新しいアプローチ - 新潟におけるサッカーサポーターの事例」修士学位請求論文（立命館大学、2002 年 3 月）、参照。
- 7) 和食は、（90 年代以降に広がる）民間スポーツクラブでは、一定のスポーツ欲求は充足できても運営等に主体的に関わるという「私

的な自治組織としてのクラブ」本来のあり方を満たすことはできないと指摘している。和食昭夫「地域スポーツの発展のために」『スポーツのひろば』2000年、3月、21頁。

- 8) 文章は設立当初。図、および現在のホームページのアドレスは下記を参照。
- 9) SON へのアンケートについて、13人というのはアンケート調査としては数として少ないものであるが、登録メンバーは「30~40人いるわけですけど、そのうちいわゆるアクティブに動いているのは15人から20人弱」（インタビューより）であることを考慮に入れると、SONの参加実態からかけ離れたものではないといえる。また、2002年のSON参加実態（WEB公開）でも、平均人数は約10人（J2と天皇杯を合わせた23試合）となっている。
- 10) 設立当初にはそのような軋轢もあったとされる。また、SONのアンケートでは参加動機（複数回答）で「サッカーが好きだから」のみをあげているのは1名であった。
- 11) Alliance2002の原資金はほぼ「もくはち」で補われており、資金の潤沢さ（経済的安定・自律性）もAlliance2002の活動を支える重要な要素である。
- 12) メルッチ、16-17頁。
- 13) メルッチ、18頁。
- 14) メルッチ、54-57頁。
- 15) SONにおいても同様の傾向を示した。全員が40代以下であり、短大・大学院卒を含めると10人が大卒である。また、どちらもほとんどが専門職に従事している。
- 16) HQは、Alliance2002立ち上げの際に、リーダーの立候補を募ったが、結果として既に中心となっていた数人のメンバーでの独自交渉で決められていった。しかし、その後は各活動の中で、頻りに活動する固定化された参加者に、「個々のメンバーの成長に合わせて」徐々に権力委譲するという方法を取っている。
- 17) 例えばAlliance2002がサポーターイベントを行うホールはHQの一人が所属するイベント会社が所有している。
- 18) メルッチ、23頁。
- 19) メルッチ、24頁。
- 20) メルッチ、29頁。
- 21) メルッチ、30頁。
- 22) メルッチ、87頁。
- 23) メルッチ、42-43頁。
- 24) 和食は「多くの場合、クラブを辞めることはその競技を続けることをあきらめることと同じだという現実」があると、日本の学校中心のスポーツ活動について指摘している。和食、前掲論文、20-21

頁。他方で、新潟県では平成14年度より中学校での必修クラブが廃止されるなど、スポーツは学校から地域へとシフトされつつあり、そこにおけるスポーツの場の変容は、総合型地域スポーツクラブ政策とともに今後検討していく必要がある。

- 25) アルビレックス新潟との協調も提起されるが、「インディペンデントだからよかったのに、結果としてアルビレックスのオフィシャルみたいな形になってしまうというのは違うのではないか」、「協会や行政と同じく、アルビレックスとも線を引いているべきだ」という意見も存在する。しかし、新潟を「ローカル」として活動する以上、「アルビレックスとの連携が鍵になる」という意見もある。
- 26) メルッチ、79頁。
- 27) メルッチ、68頁。
- 28) メルッチ、81頁。
- 29) 山下、前経書、15頁。
- 30) このような地域的課題との結びつきは、各地のいくつかのサッカーサポーター・ボランティアグループの活動にみられる。例えば、キッククラブアクティブなど、下記ホームページ参照。また、山下高行「グローバリゼーションの像 グローバリゼーションとスポーツ」『近代ヨーロッパの探求 スポーツ』有賀南陽他著、ミネルヴァ書房、2002年も参照。

ホームページ

Jリーグ：<http://www.j-league.or.jp>

Alliance2002：

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/qa2/tag/Alliance2002.html>

キッククラブアクティブ：<http://www.c-marinet.ne.jp/~kaz/>